

## 5.4. 免疫系その他への影響

### 5.4.1. 仮説の紹介

ヒト及び実験動物における微小粒子状物質の吸入による感染抵抗性やアレルギー反応等、免疫系への影響に関する発現機序を解明する研究が、呼吸器系への影響に関する機序の解明と併せて行われている。また、近年、生殖器への影響や神経・行動に対する影響に関してもその機序を解明する研究が行われ始めている。

大気中の粒子状物質及びその成分による免疫系への影響に関して、2つの機構について仮説の検証を行う。

- (1) 呼吸器における感染抵抗性が低下する
- (2) アレルギー性疾患が増悪する

また、その他の影響として、2つの機構の仮説の検証を行う

- (3) 生殖器への影響が生じる
- (4) 神経・行動への影響が生じる

### 5.4.2. 論文の紹介

#### 5.4.2.1. 呼吸器における感染抵抗性が低下する

Zelikoffら(2002)は、CAPs(粒径  $PM_{2.5}$ 、 $65\sim 90\mu g/m^3$ )の曝露時間5時間の急性曝露影響を検討し、 $PM_{2.5}$ 曝露は感染ラット肺からの菌排出を遅らせること、及び粒子中のFeが関与していることを示唆する結果を得た。肺炎球菌に感染したラットへCAPsを曝露すると18時間後、24時間後には清浄空気曝露群に対して有意な細菌負荷率(relative bacterial burdens)の増加を認めている。金属塩(Fe, Ni, Mnの塩化物)曝露では、とくにFe(2価)の曝露後に回収したBALFのマクロファージから産生されるスーパーオキシドアニオン( $\cdot O_2^-$ )が清浄空気曝露群より有意に高く、同じくBALF中の好中球やリンパ球は有意に下がるがマクロファージは増加し、感染ラットでの細菌負荷は増加している。これらの結果から、ニューヨークでの大気粒子曝露とFe塩化物曝露の肺炎や免疫能に対して類似した影響を及ぼし、大気粒子の免疫毒性にはFeが関与していると考えられると述べている。

Campbellら(1981)は、4~8週齢のCR/CD-1マウス(雌 一群20匹)を用いて、DE曝露を行いその後の感染抵抗性について検討した。DE曝露は、急性(2時間と6時間)、亜急性(8時間/日で8、15、16日間)、慢性(44、46週間)を行い、TSPとして平均 $6.4mg/m^3$ の濃度で、 $NO_2$ の平均は2.8ppmであった。曝露後、*Streptococcus pyogenes*、あるいはA/PR8-34インフルエンザウイルスに感染を行いその致死率への影響を2週間にわたり調べた。その結果、*Streptococcus pyogenes*感染に対しては、すべての曝露期間で、清浄空気群にくらべ致死率の増加がみられた。しかしながら、A/PR8-34インフルエンザウイルス感染に対し

ては曝露群と対照群とで差はみられなかったと報告している。

Hahon ら (1985)は、感染抵抗性への粒子状物質の影響を調べる目的で、CD-1 マウス(雌)を  $2\text{mg}/\text{m}^3$  炭粉群、 $2\text{mg}/\text{m}^3$  DE 曝露群、 $1\text{mg}/\text{m}^3$  DE +  $1\text{mg}/\text{m}^3$  炭粉の混合群、清浄空気曝露群の 4 群にわけ、7 時間/日、5 日/週の曝露条件で 1、3、6 ヶ月曝露を行った。マウスは 1 群 150 匹で、それぞれの期間に 600 匹を用いて実験を行った。曝露後のインフルエンザウイルス感染による致死率には 1、3、6 ヶ月曝露で群間での差はみられなかったが、インターフェロンレベルでは、肺において 3 ヶ月曝露ですべての群でその抑制がみられ、血清中でも混合曝露群で抑制がみられた。6 ヶ月曝露では、肺と血清において DE 単独、あるいは DE と炭粉混合群でインターフェロンの産生抑制がみられた。6 ヶ月の曝露ではすべての曝露群で血中の凝集抗体価の低下が認められた。

Hiramatsu ら (2005)は、マウスに DE(約  $3\text{mg}/\text{m}^3$ 、 $3.1 \pm 0.2\text{mg}/\text{m}^3$ )または清浄空気(対照群)を 1 ヶ月、2 ヶ月、6 ヶ月間 (7 時間/日、5 日間/週) 曝露させた。それぞれ曝露終了日の翌日に結核菌 ( $1 \times 10^6$  CFU、Kuronos strain) を感染させ、感染から 7 週間後に肺の病変部の大きさ計測、及び肺、脾臓組織中の結核菌を培養しコロニーを数えた。病変部の大きさは対照群に比べ DE 6 ヶ月曝露群で有意に大きく、肺組織中の結核菌によるコロニー生成は DE 6 ヶ月曝露群で有意に増加した。また肺組織における TNF- $\alpha$ 、IL-1 $\beta$ 、IL-12p40、IFN- $\gamma$ 、iNOS の mRNA 発現量は DE 2 ヶ月間曝露群でわずかに上昇したが、DE 6 ヶ月間曝露群では、IL-1 $\beta$ 、IL-12p40、IFN- $\gamma$ 、iNOS の mRNA 発現量が減少した。結核菌感染における DE 曝露は、肺胞マクロファージの持つ結核菌を殺す能力を低下させ、結核菌感染の感受性を高める可能性が示唆された。

Harrod ら (2005)は、DE を  $30 \sim 1,000 \mu\text{g}/\text{m}^3$  の曝露濃度で、6 時間/日の条件で、1 週間あるいは 6 ヶ月間マウスに吸入曝露し、肺の微生物感染に対するクリアランスと肺の病理組織像を解析した。1 週間の DE の吸入により、緑膿菌のクリアランスは低下し、その低下は低濃度領域( $30 \sim 100 \mu\text{g}/\text{m}^3$ )では濃度依存的であった。 $1,000 \mu\text{g}/\text{m}^3$  の DE 濃度におけるクリアランスは  $100 \mu\text{g}/\text{m}^3$  と同程度であった。また、6 ヶ月間 DE 吸入を行い、同様の解析をしたところ、肺のクリアランスの低下は認められなかった。1 週間の DE 吸入曝露マウスの肺病理像を解析したところ、緑膿菌感染により炎症像が認められ、炎症症状は  $30 \sim 100 \mu\text{g}/\text{m}^3$  の DE 濃度領域で濃度依存的な悪化が認められた。DE の免疫系への影響を微生物感染防御の視点から解析し、短期曝露後による免疫能の低下を微生物のクリアランス能が落ちていることから証明した。

Lambert ら (2003)は、マウスに CB を  $40 \mu\text{g}$ /個体の量で気管内投与後、RSV

を感染し、曝露後 1~10 日間の期間で観察を行い、炎症反応への影響を検討した。CB 処理により BALF 中炎症細胞数に誘導が認められた。処理直後では好中球が強く誘導された。また、CB+RSV 併用処理により、処理 7 日後に好中球の強い誘導が認められ、処理 2~10 日後ではリンパ球の CB による誘導が RSV 処理により若干抑制された。TNF 産生量は RSV 単独処理に比較し、CB+RSV 処理で処理 1~2 日後では抑制され、4~7 日後では促進された。CB 及び RSV の併用処理 4~10 日後の IL-13 産生量が誘導された。また、IP-10 mRNA 発現量は CB 処理により抑制され、RSV により誘導される IP-10 mRNA 発現量も CB 併用処理により抑制された。その他、Th2 タイプのサイトカイン・ケモカイン産生量は CB 処理により誘導されたが、Th1 タイプのサイトカイン・ケモカイン産生量は抑制された。感染前の微小粒子投与は、その後の免疫応答をアレルギー増強に導く可能性を示唆している。本研究結果より、カーボンナノ粒子の気管内投与により、炎症症状が誘導され、獲得免疫系のうち細菌感染防御に関与する Th1 ではなく、アレルギー応答である Th2 が有意になることを示した。

#### 5.4.2.2. アレルギー性疾患が増悪する

Kleinman ら (2005)は、OVA 感作したマウスを CAPs に曝露しアレルギー反応への影響を各種指標(IL-5、IL13、OVA 特異的 IgE、IgG1、好酸球、多核白血球)を用いて検討した。実験は、道路沿道から 50m、150m 離れた地点で集めた CAPs を用いて行われた。曝露濃度は、50m 離れた地点で集めた CAPs は、fine ( $<2.5 \mu m$ )で  $498 \mu g/m^3$ 、ultrafine( $<0.15 \mu m$ )で  $433 \mu g/m^3$ 、150m 離れた地点で集めた CAPs は、fine で  $442 \mu g/m^3$ 、ultrafine で  $283 \mu g/m^3$ であった。

曝露群でのアレルギー反応指標の増加及び道路からの距離が近いほど強い影響を認め、自動車排気粒子は気道アレルギー反応を引き起こすことを示唆した。道路からの距離が近いほど超微小粒子を多く含むことから、より粒径の小さい粒子の方がアレルギー反応を増悪する作用が強いことが示唆された。

Steerenberg ら (2005)は、OVA 感作マウスモデルを用い、ヨーロッパ各都市で採集した PM のアレルギー反応におけるアジュバント効果を調べた。5 都市で採取した PM (coarse $2.5 \sim 10 \mu m$ 、fine $<2.5 \mu m$ )を 3mg/ml、9mg/ml で気管内投与し、対照群：NaCl、OVA、OVA+オタワ標準粉じん(EHC-93)を気管内投与した。投与パターンは、OVA+PM により感作(0 日、14 日、9mg/ml、3mg/ml PM/個体)後、35、38、41 日に OVA でチャレンジ、42 日目に殺処分、観察した。その結果、ウッチ(Lodz、ポーランド)、ローマ、オスロ、アムステルダム順にアジュバント効果が高いことが示された。また、fine PM の方が coarse PM より増強効果が高いこと、PM を採集した季節ごとに効果が異なること、水溶性及び不溶性の成分のいずれも効果を有することが示された。

Campbell ら (2005)は、アレルギー感作(肺、OVA)の状態のマウスにロサンゼルス交通量の多い場所での CAPs を曝露した。曝露濃度を 20 倍濃縮とし、 $0.18 \mu\text{m}$  以下の粒子を  $282.5 \mu\text{g}/\text{m}^3$  で、 $2.5 \mu\text{m}$  以下の粒子を  $441.7 \mu\text{g}/\text{m}^3$  で、4 時間/日、5 日/週、2 週間曝露した。その後 OVA 再曝露により肺での炎症を惹起させ、その時の脳における炎症性サイトカイン及び転写因子の増減を測定した。その結果、曝露群では炎症性サイトカイン(TNF- $\alpha$ 、IL-1 $\alpha$ )及び転写因子(NF- $\kappa$ B)の有意な増加が認められ、微小粒子成分が脳内での神経変性を誘導すると報告している。

Hamada ら (2000)は、新生児マウスに ROFA と OVA をエアロゾル投与して抗原感作への影響を調べた。3% OVA のエアロゾル投与は、生後 3 日目より 11 日間と 25 日目より 3 日間の計 14 回行い、ROFA のエアロゾル投与(50 mg/mL、30 分/日)は生後 6 日、8 日、10 日の 3 回行った。その結果、BALF 中の炎症性細胞においては大きな変動はみられなかったが、メサコリンに対する気道反応性の亢進が ROFA+OVA 群でみられた。また、抗原特異的な IgE と IgG 産生の増強も ROFA+OVA 群でみられたと報告している。

Fujimaki ら (1997)は、マウスの IgE 抗体産生に及ぼす影響を調べるために、0、3.0、6.0mg/m<sup>3</sup>濃度の DE で 12 時間/日、7 日/週で 3 週間曝露し、OVA 抗原感作を 3 週間間隔で 3 回行った。体重、胸腺重量に差はなかったが、脾臓重量の増加が高濃度曝露でみられた。血清中の抗 OVA 特異的 IgE 抗体価は、6.0mg/m<sup>3</sup>群で有意に高かった。脾臓細胞を試験管内で OVA 刺激して誘導したサイトカイン産生では、6.0mg/m<sup>3</sup>曝露群で対照群と比べ IL-4、IL-10 は高く、IFN- $\gamma$  は低い結果であった。DE の吸入は、サイトカインネットワークの変化を誘発して抗原特異的 IgE 産生に悪影響を及ぼすことが示された。

Alessandrini ら (2006)は、BALB/c マウスを用いて超微小カーボン粒子のアレルギー性気道炎症への影響を調べた。曝露濃度は、119、332、526  $\mu\text{g}/\text{m}^3$ (平均)であった。カーボン粒子の曝露時間は 24 時間であるが、抗原感作とのタイミングを検討し、その影響メカニズムを解析した。その結果、最終の抗原感作より 24 時間前、及び 4 日前にカーボン粒子を曝露した群でより炎症反応やサイトカイン産生が増強しており、抗原感作後の曝露では炎症反応の遅れやサイトカイン産生の低下がみられた。抗原感作前のカーボン粒子曝露は、強力なアジュバント効果を生じることが示された。

Fujimaki ら (1994)は、DEP と IgE 産生との関連について明らかにするために、BALB/c マウスに OVA 抗原とともに DEP を 0.3mg/個体の投与量で気管内投与して縦隔リンパ節細胞での細胞増殖、サイトカイン産生を調べた。細胞増

殖反応は、OVA 群に比べ DEP+OVA 群で明らかに亢進し、IL-4 産生、抗 OVA IgE 抗体価共に DEP+OVA 群で高い値を示した。DEP による免疫増強効果を示唆している。

Diaz-Sanchez ら (1997)は、13 人のブタクサの皮内テストで陽性の非喫煙者 (男 6 人、女 7 人 : 21~49 歳) に対して DEP (0.30 mg) とブタクサ抗原の両者を組み合わせて、ヒトの鼻内にチャレンジを行い、局所の液性免疫に与える影響を検討した。DEP は、light-duty のディーゼル乗用車の排気から採集した。ブタクサ抗原単独のチャレンジと比較して、DEP とブタクサ抗原の組み合わせは抗原特異的 IgE の著明な増加をもたらしたが、総 IgE や IgE 分泌細胞数は変化しなかった。総 IgG4 や抗原特異的 IgG4 も増加したが、総 IgG は変化しなかった。両者の共同作用は alternative splicing による epsilon mRNA (CH4-M1'-M2、CH4-M2'、CH4-M2''、CH4-S、CH4'-CH5) のレベルにおいても CH4'-CH5 を除いて観察された。さらにブタクサ抗原単独では、低レベルのサイトカイン mRNA が検出されたにすぎなかったが、ブタクサ抗原と DEP の組み合わせは Th1 タイプのサイトカイン (IFN- $\gamma$  や IL-2) の表現の減少をもたらしたが、他のサイトカイン (IL-4、IL-5、IL-6、IL-10、IL-13) の mRNA の表現の増加をもたらした。DEP とアレルゲン曝露の相乗作用はアレルゲン誘導性の呼吸器系疾患の増加を示唆する重要な所見と考えられると述べている。

Fujieda ら (1998)は、8 人の健康な非喫煙者 (男 4 人、女 4 人 : 21~36 歳 : 全員がブタクサの皮内反応テストが陽性) 全員に、異なった日に、ブタクサ・アレルゲンのみ、DEP のみ、及び DEP+ブタクサ・アレルゲンのチャレンジを受けさせた。被験者は、ブタクサ・アレルゲン (Amb a I) を 10 AU から始めて即時アレルギー症状がでるまで 10 倍ずつ濃度をあげるか、1,000 AU まで鼻にスプレーすることによりチャレンジした。8 週間あけて、DEP (0.3 mg) とブタクサ・アレルゲンの両方あるいは DEP のみに、無作為にチャレンジされた。100  $\mu$ l の食塩水に DEP (0.15 mg) を含んだものを鼻孔にスプレーし、総量 0.3 mg の DEP を曝露した。各被験者は、チャレンジ前の三つの異なった日と、チャレンジ後 4 日目に 5 ml の生理食塩水で鼻洗浄を行い、鼻洗浄液について分析を行った。新しい nested polymerase chain reaction-based approach (ポリメラーゼ連鎖反応に基づいたアプローチ) による deleted switch circular DNA (switch circles) の検出を、IgE isotype switching が起きているという明確な分子的証拠として採用した。DEP にブタクサ抗原を加えてヒトの鼻にチャレンジすると、局所的な IgE 産生を増強し、局所的なサイトカイン産生を刺激し、ブタクサ・アレルゲンに対する粘膜の IgE 抗体を顕著に増加させることが示された。DEP+ブタクサ・アレルゲンのチャレンジ後 4 日目に、鼻洗浄細胞中に  $\mu$  から  $\varepsilon$  への switching を示す deleted switch circular DNA ( $S_{\varepsilon}/S_{\mu}$ ) の

クローンを検出した。DEPのみあるいはブタクサ・アレルゲンのみでのチャレンジでは、鼻洗浄細胞中に switch circular DNA は検出されなかった。これらの結果は、DEPとブタクサ・アレルゲンの粘膜刺激の複合は、ブタクサ・アレルギーのヒトで in vivo の IgE isotype への switching を引き起こしうることを示している。これらの結果は、ヒトでの in vivo の IgE isotype の switching を直接的に初めて示したものであると述べている。

Diaz-Sanchez ら (1999)は、DEP が新抗原に対する粘膜 IgE 反応に対して粘膜アジュバントとして作用するかどうかを調べた。新抗原は、ヒトではクロス反応する既知の抗体をもたない marine mollusk (*Megathura crenulata* : 海の軟体動物)の血液から分離した糖タンパク質の keyhole limpet hemocyanin (KLH) を用いた。DEP は、ディーゼル乗用車からの排気を捕集したものである。被験者は、25 人の健康な非喫煙者 (男 11 人、女 14 人 ; 21~55 歳) で、全ての被験者は、塵ダニ・アレルゲンを除いて、少なくとも一つの空中アレルゲンに対して陽性の皮膚プリック・テストを示した。さらに全被験者は、季節性の気道アレルギーの既往があるが無症状であった。10 人のアトピーの被験者を、1 mg の KLH で鼻を最初に免疫して、次いで 100  $\mu$ g の KLH で隔週に 2 回鼻にチャレンジした。また、15 人の異なるアトピーの被験者に DEP を各 KLH 曝露の 24 時間前に投与し、全く同じ鼻の KLH 免疫を行った。DEP は 0.3 mg を 200  $\mu$ L の食塩水に浮遊させ鼻にスプレーした。最初の KLH 投与後、14、28、29 及び 32 日目に鼻洗浄を行い KLH に対する抗体を調べた。その結果、32 日目では、KLH のみへの曝露は、鼻洗浄液中で、抗 KLH IgG は全ての被験者に、IgA は 10 人中 8 人に、IgG4 は 10 人中 4 人に検出されたが抗 KLH IgE は誰にも検出されなかった。反対に、KLH に先立ち DEP でチャレンジすると、15 人のうち 9 人が抗 KLH 特異的 IgE を産生した。KLH のみでみられたのと同様のレベルで抗 KLH 特異的 IgG と抗 KLH 特異的 IgA も検出された。DEP と KLH を受けた被験者では、鼻洗浄液中の IL-4 レベルを有意に増加させたが、IFN- $\gamma$  レベルは増加しなかった。一方、これらのレベルは、KLH のみを受けた被験者では変化がみられなかった。これらの研究は、DEP が新しい IgE 反応に粘膜アジュバントとして作用し、アレルギー感作を増加させるかもしれないことを示していると述べている。

Diaz-Sanchez ら (2000)は、プリック・テストでハウスダスト・ダニに陽性の 11 人の非喫煙者 (男 6 人、女 5 人 : 21~55 歳) に、既知の量の *Dermatophagoides pteronyssinus* (Der p 1) を含むハウスダスト・ダニの抽出物を鼻にスプレーして、症状スコア (鼻搔痒感、鼻閉、鼻汁、くしゃみ) が 5 になるまで増量した。その後、被験者は、300  $\mu$ L の食塩水に 0.3 mg の DEP (Isuzu のディーゼル・エンジンの排気から捕集したもの) または CB を同様に含むもの、及び 300  $\mu$ L

の食塩水の何れかを鼻に噴霧し、次いでダスト・ダニ抗原で症状スコア 5 が得られるアレルゲン量を調べた。その結果、アレルゲンのみの症状スコアは 3.7、DEP のみは症状を誘発しなかったが、DEP+アレルゲンはスコアが 9.9、CB では症状スコアは増強しなかった。鼻洗浄液中のヒスタミン濃度は、アレルゲンのみに比し、DEP+アレルゲンでは約 3 倍近く増加した。DEP 中の化学物質がマスト細胞に直接作用するかどうかを調べるために、マウスの肥満細胞系 (MMC-34) を用いて、高親和性 IgE 受容体の IgE/ $\alpha$ -IgE クロスリンクのもとで、DEP の溶解性有機化学物質と一緒に培養すると、 $\beta$ -hexosaminidase とヒスタミンの放出が増強され、DEP 濃度との間に量-反応関係がみられた。これらの結果は、DEP への曝露はマスト細胞の脱顆粒を増強することによりアレルゲンに対する臨床症状の重症度を増強させることを示唆していると述べている。

Hauser ら (2003) は、5 人のアトピー (男 2 人、女 3 人 : 23~39 歳) と 3 人の非アトピー (男 2 人、女 1 人 : 27~38 歳) の 8 人の被験者に対し、鼻マスクを介して以下の曝露を行った。即ち、residual oil fly ash (ROFA) 粒子曝露の後にアレルゲンなしのプラセボへの曝露 (session A)、清浄空気曝露の後にアレルゲン曝露 (session B)、及び ROFA 曝露の後にアレルゲンの曝露 (session C)。各曝露は、ROFA (目標濃度は  $1.0 \text{ mg/m}^3$  だったが、実際は  $0.96 \mu\text{g/m}^3$ ) または清浄空気への安静下で 1 時間の鼻マスクを介しての鼻曝露に続けて、3 時間後に穀物花粉かプラセボのチャレンジを受けた。ROFA は、ボストン発電所から入手したものを Wright Dust Feed Aerosol Generator を用いて再浮遊させ、 $2.5 \mu\text{m}$  以上の粒子を除去するために Harvard Marple Impactor を通過させた。MMD は、 $1.55 \mu\text{m}$  であった。花粉アレルゲンは、6 種類の吸入性アレルゲン [*Dermatophagoides pteronyssinus* (ダニ抗原)、mixed grasses、ragweed (ブタクサ)、birch tree (カバノキ)、oak tree (オーク)、*Alternaria* (アルテルナリア属のカビの一種)] で皮膚テストを行い、一つ以上に陽性であれば、アトピーとした。この皮膚テストの結果をもとにチャレンジに使用する空中アレルゲンを決めた。鼻洗浄が、粒子または清浄空気曝露前に、そして曝露直後、及び、花粉チャレンジ後 4、18、及び 42 時間後に行われた。各鼻洗浄液について、細胞数、分画、及びサイトカインの測定を行った。粒子に続いてアレルゲンが投与されたとき、花粉チャレンジ直後の鼻洗浄液中の白血球と好中球の有意な増強 (それぞれ、 $29.7 \times 10^3$  細胞/mL と  $25.4 \times 10^3$  細胞/mL) が、アトピーではみられたが、非アトピーの被験者ではみられなかった。これは、それぞれ、143% と 130% の増強を示している。IL-4 の増強反応は、 $3.23 \text{ pg/mL}$  ( $p=0.06$ ) で 395% の増強であった。アトピー性の被験者では、清浄空気に比し粒子がアレルゲン曝露に先行する場合には反応が増強される証拠があると述べている。

Alexis ら (2006) は、9 人の健康な非喫煙者 (男 3 人、女 6 人 : 年齢 18~35

歳)に以下に示す3種類の被験物質をそれぞれネブライザーで、調整された500 mLの一回換気量で25吸入/分の頻度で、約30分間経口吸入させた。被験物質は、対照群としてネブライズされた食塩水(0.9%)、ノースカロライナ州のChapel HillでサンプリングしたPM<sub>10-2.5</sub>で、生物学的物質を不活性化するために120°Cで20時間熱処理したPM<sub>10-2.5</sub>(PM<sub>10-2.5</sub><sup>-</sup>)(3 mgのPM<sub>10-2.5</sub>を4 mLの0.9%の無菌食塩水に再浮遊したもので、MMADは5 μm)または熱処理をしていないPM<sub>10-2.5</sub>(PM<sub>10-2.5</sub><sup>+</sup>)で、これらを別々の日に同様に吸入した。食塩水吸入時に、Tc99m-sulfurコロイド(SC)粒子を食塩水に混合し、PM<sub>10-2.5</sub>が気管支に供給されていることをガンマ・カメラで確認した。各々の吸入後3時間目に、痰を誘発させ、痰について炎症細胞とサイトカイン、炎症性サイトカインのmRNA、細胞表面の表現型及び貪食機能を調べた。その結果、PM<sub>10-2.5</sub><sup>+</sup>吸入で、食塩水吸入に比して、炎症マーカーである好中球%とマクロファージのTNF-αのmRNA発現量が有意(p<0.05)に誘発された。また、eotaxinが増加し、マクロファージの表現型で免疫調節能が増加し、単球の貪食能も増加した。生物活性がマイナスのPM<sub>10-2.5</sub><sup>-</sup>吸入では好中球増加への影響はみられなかったが、TNF-αのmRNA、eotaxinレベル、細胞表面マーカーの反応及び貪食能を有意(p<0.05)に弱めた。以上より、PM<sub>10-2.5</sub>の生物学的構成要素は、必ずしも好中球の反応を誘発しないが、マクロファージの反応調節には必要であると述べている。また、単球の細胞を活性化し、潜在的に、eotaxinレベルを増強することによりアレルギー患者におけるアレルゲンあるいは細菌に対する反応を増強する可能性が示唆されたと報告している。

Stenforsら(2004)は、25人の健康な非アトピー性の者(男16人、女9人:平均年齢24歳;19~42歳)及び15人のβ<sub>2</sub>作動薬の吸入のみしている軽症の喘息患者(女5人:平均年齢30歳;22~52歳)を大気レベルのDE[10 μmの空気力学径の50%カット-オフの粒子(PM<sub>10</sub>)濃度が108 μg/m<sup>3</sup>(94~124)、COは1.7 ppm(0.6~2.5)、NO<sub>2</sub>は0.2 ppm(0.1~0.3)]に中等度の間欠的運動下(分時換気量が15-20L/min/m<sup>2</sup>の負荷で15分間の運動と安静の繰り返し)で2時間曝露し、肺機能と気道炎症を評価した。DEは、Volvoのディーゼル・エンジンで発生させた。肺機能はBody-plethysmographでsRaw(特異的気道抵抗)、FVC及びFEV<sub>1</sub>を測定した。曝露後、6時間目に気管支鏡を行い、気管支生検、気管支洗浄液(BW)及びBALFを採集した。粘膜生検については、特異的細胞マーカー、血管内皮接着分子及び細胞内接着分子、サイトカインや転写因子を測定した。BW及びBALFについては、細胞分画、アルブミン、総タンパク質、IL-6、IL-8、GM-CSF、methyl-histamine、MPO及びECPを測定した。DE曝露後、FEV<sub>1</sub>やFVCは、どのグループも影響がみられなかった。sRawは、空気曝露に比し、健康者では4.1%(p<0.01)、喘息患者では6.5%(p<0.01)の増加を示したが、グループ間では反応の大きさに統計的な差はみられなかつ

た。健康な被験者は、DE 曝露後、気道炎症を起こし、気道洗浄液における IL-6 と IL-8 タンパク質の増加、気管支粘膜における IL-8 mRNA の増加と内皮の接着分子 (P-selectin と VCAM-1) の upregulation を伴った気道の好中球増加とリンパ球増加を示した。喘息患者では、DE 曝露は、好中球性反応を引き起こしたり、既存の好酸球性気道炎症を増悪させたりすることはなかった。サイトカインの IL-10 の上皮染色は、喘息グループでは DE 後に増加していた。DE による IL-10 の誘発は、喘息患者の気道炎症の増強に寄与するかもしれない。現在の WHO の大気質基準以下の濃度で 50%カット-オフの空気力学径が  $10\mu\text{m}$  の粒子が、健康者と喘息患者で異なる影響がみられることが、この研究で観察された。これらの異なる反応の意味を解明するには更に研究が必要であると述べている。

Holgate ら (2003)は、DEP への曝露による臨床的感受性が、急性の好中球性炎症あるいはアレルギー性気道炎症の増加で説明できるかどうかを、15 人の非喫煙者の喘息グループ (男 10 人、女 5 人、平均年齢 30 歳 ; 23~52 歳) と 25 人の非喫煙者のコントロール・グループ (男 16 人、女 9 人、平均年齢 25 歳 ; 19~42 歳) について調べた。DE は、Volvo TDIF-1990 で発生させ、曝露チャンバー内の平均濃度は  $\text{PM}_{10} : 108.3\mu\text{g}/\text{m}^3$ 、 $\text{CO} : 1.7\text{ppm}$ 、 $\text{NO} : 0.6\text{ppm}$ 、 $\text{NO}_2 : 0.2\text{ppm}$ 、 $\text{HC} : 1.4\text{ppm}$ 、 $\text{HCHO} : 43.5\mu\text{g}/\text{m}^3$  であった。被験者は間欠的運動下 (分時換気量が  $15\sim 20\text{L}/\text{min}/\text{m}^2$  体表面積の負荷で 15 分の運動と 15 分の安静の繰り返し) で 2 時間曝露され、曝露前後に鼻洗浄液採集、曝露終了後 6 時間目に気管支鏡を行った。コントロール・グループ及び喘息グループでは、気道抵抗の有意な増加がみられた。この増加は、コントロール・グループでは気管支洗浄液 (BW) 中の好中球の増加及び BAL 中のリンパ球の増加と関連していた。コントロール・グループの気管支生検組織では、内皮接着分子 P-selectin の upregulation がみられ、また BALF 中の IL-8 タンパク質濃度及び IL-8 mRNA 遺伝子発現量の有意な増加がみられた。末梢血中の赤血球や白血球数には変化がみられなかった。喘息グループの気道粘膜の生検組織は、空気曝露後に好酸球性気道炎症がみられたが、DE は、気道の好中球、好酸球やその他の炎症性細胞、またサイトカインや炎症のメディエーターの有意な変化をもたらさなかった。唯一の明確な影響は、生検組織の IL-10 染色で有意な増加がみられたことである。この研究は、あまり高くない濃度の DE であっても、コントロール被験者の気道に明白な炎症効果を及ぼすこと、IL-8 産生に直接影響し内皮接着分子の upregulation を起こすことを示している。DE に対する喘息患者の感受性が増加するという臨床報告があるが、この感受性は好中球性の炎症や既存の喘息の気道炎症の悪化によるものではなさそうである。喘息患者で DE への曝露後 IL-10 の増加がみられたことは、気道炎症に何らかの影響を引き起こすかもしれないことを示唆していると述べている。

#### 5.4.2.3. 生殖器への影響が生じる

Lee ら (1980)は、SD ラット(雄)に 13 倍に希釈した DE を 20 時間/日ずつ、42 日間曝露し、肺、肝臓、精巣及び前立腺の AHH (Aryl Hydrocarbon Hydroxylase)活性と EH (Epoxide Hydrolase) 活性の変化を調べた。その結果肝臓が最大の AHH 活性を示し、対照群の 1.3~1.4 倍に増加していた。一方、対照群に比べて最も増加率が高かったのは前立腺で、曝露 15 日目で 4.5 倍に増加し、全曝露期間を通じて高い値を維持していた。精巣での活性変化は認められなかった。EH 活性もすべての臓器で有意な変化はなかった。本実験は吸入実験で生殖器系にも影響が及んでいることを認めた。しかし、DE 濃度が総炭化水素濃度 14.2ppm と示されているだけで、DEP、NO<sub>x</sub>等の濃度は測定されていない。

Pereira ら (1981)は、DE 中の化学変異原物質が精巣に到達しての影響を調べるために、DEP 濃度として 6mg/m<sup>3</sup>の DE を A マウス(雌)に 8 時間/日、31~39 週間曝露させて精子の形態異常を調べた。エオジン Y 染色をほどこして精子の頭部異常を定量化し、対照群との間に有意な変化はなかったと報告している。

Pepelko と Peirano (1983)は、CD-1 マウスの雌雄各 100 匹に、12mg/m<sup>3</sup>という極めて高濃度の軽量級ディーゼルエンジンからの DE を、8 時間/日、7 日/週ずつ吸入させた実験で次世代に及ぼす影響を調査した。その結果曝露による次世代への影響は軽微であり、全体の繁殖能力と生存率にも著しい変化はなかったと報告している。また、6mg/m<sup>3</sup>の DE を、T マウス雄 100 匹、雌 54 匹に、8 時間/日、7 日/週、7 週間吸入させる実験を行い雌雄いずれにも著しい優性致死影響はなく、唯一、卵巣黄体数の顕著な減少を認めた。粒子状物質濃度として 6mg/m<sup>3</sup>の重量級ディーゼルエンジンからの DE を、SD ラット及びウサギ(ニュージーランドホワイトラビット)に 8 時間/日、7 日/週ずつ吸入させる実験を行った。実験は、妊娠 5~16 日のラット(20 匹)、妊娠 6~18 日のウサギ(20 羽)を用いて行い、同じ母親から生まれた仔の生存胎仔数、死亡胎仔数、体内に吸収され子宮に吸収痕を残す胚吸収、着床部位、黄体、胎仔の平均体重等は、対照群との間に著しい差が認められなかったと報告している。

Quinto と de Marinis (1984)は、DEP を体重 kg 当り 50、100、200mg ずつ、5 日間続けて、腹腔内に注射した実験を行い、C57B1/6 マウスと C3H マウスの第 1 代 F<sub>1</sub> マウスで、精子数の減少と睪丸重量の減少、精子奇形等が認められた。200mg 投与群においては、対照群に比べ 8 倍の奇形増加を示し、精子数の著しい減少も認められた。

Watanabe と Oonuki (1999)は、DE が成長期のラットの生殖系、内分泌系に

及ぼす影響を調べた。実験は粒子濃度として  $5.63\text{mg}/\text{m}^3$  ( $4.1\text{ppm NO}_2$ 、 $8.10\text{ppm NO}$ ) の濃度の総排気ガス (I 群) と粒子をフィルターで除いた除粒子排気ガス成分 (II 群) 及び清浄空気 (III 群) について行われた。曝露条件は、6 時間/日、5 日/週であり、3 ヶ月間曝露した。血清中の男性ホルモン (テストステロン) と女性ホルモン (エストラジオール) 濃度は I、II 群で有意に増加し、卵胞刺激ホルモン濃度は逆に I、II 群でともに有意に低下した。精巣重量は 3 群間で変化はないが、精子産生数と精巣の透過性指標であるヒアルロニダーゼ活性は有意に低下した。卵胞刺激ホルモン濃度と精子産生能力との間に直接的相関が認められたが、精巣のライディッヒ細胞やセルトリ細胞に形態的異常は認められなかった。これらの結果は、DE は副腎ホルモンの分泌を促進し、ゴナドトロピン遊離ホルモンを抑制して、ラットの精子産生を阻害していることを示唆していると考えられる。なお、これらの影響は、除粒子排気ガス成分群で若干弱まる傾向はあるが、明瞭に認められたことから、DE のガス成分のほうが粒子状成分より内分泌系攪乱に寄与していると述べている。

Yoshida ら (1999) は、DEP 濃度として 1 時間平均値が  $0.3$ 、 $1.0$  及び  $3.0\text{mg}/\text{m}^3$  の DE を 12 時間/日で 1~10 ヶ月間 ICR マウス (雌) に吸わせ、精子の運動能力、精子産生能力及び精巣の形態変化等を調べた。その結果、精子の運動能力が低下することは認められなかった。しかし、1 日当たりの精子産生能力は DE の曝露期間につれて低下傾向を示し、6 ヶ月目で最も顕著になり、対照群の各々 29%、36% 及び 53% まで低下し、いずれの値も対照群より有意に低下していた。この精子産生能力の低下は、1 ヶ月間清浄空気に戻すと回復する傾向が認められたが、 $3.0\text{mg}/\text{m}^3$  群ではなお 29% 低下していた。なお、体重、精巣重量、精巣上体重量等に有意な低下は認められなかった。しかし、精巣組織の光学顕微鏡及び電子顕微鏡による観察では、男性ホルモンを産生するライディッヒ細胞の形態異常が観察された。さらに、DE 吸入マウスでは、黄体形成ホルモン受容体の mRNA の発現量も DEP 濃度に依存して低下した。これらの結果から、男性ホルモンの合成能力が低下したこと、黄体形成ホルモンのホルモン作用発現不全等が関与して精子産生能力が低下したことが示唆されている。

Watanabe と Kurita (2001) は、Fisher ラットを用い妊娠期間中の DE (濃度は粒子: $5.63\text{mg}/\text{m}^3$ 、 $\text{NO}_2$ : $4.10\text{ppm}$ 、 $\text{NO}$ : $8.10\text{ppm}$ )、粒子を除いた DE 及び清浄空気に生殖時から妊娠 20 日まで 6 時間/日で曝露を行った。性器-肛門間距離は DE 及び DEP を除いた DE 群でいずれも清浄空気群に比べ長かった。組織学的な検討から精巣、卵巣及び胸腺の分化が遅れかつ乱れていることが見いだされた。妊娠した母獣の血清中のテストステロン濃度は DE 及び DEP を除いた DE 群のいずれにおいても有意に増加することが見いだされた。

#### 5.4.2.4. 神経・行動への影響が生じる

Laurie ら (1978)は、SD ラット(雌)に対し、6mg/m<sup>3</sup>の DEP を含む DE に 20 時間/日、7 日/週で 6 週間曝露すると、自発的な運動の減少が見られることを明らかにした。

Laurie と Boyes (1980)は、新生仔期に 6mg/m<sup>3</sup>の DEP を含む DE に曝露され(分娩後 17 日間、20 時間/日)、その後清浄空気下で飼育された 15 ヶ月齢の動物では、バーを押して食餌を取る行動の習得率が対照よりも有意に遅くなることを見いだした。

Liu ら (2002)は、ラット(雄)(20 匹)にガソリン二輪車排気ガス(ME、Motorcycle Exhaust)を吸入処理(2 時間/日、2 週間または 4 週間の吸入曝露、濃度の詳述はなし)、あるいはガソリン二輪車排気ガス中微小粒子(MEP)を 0.1g/kg(体重)の投与量で気管内投与し、最終投与の翌日に行動薬理的探索を行った。その結果、運動機能(回転棒からの落下時間で評価)が ME の 4 週間吸入曝露処理及び MEP の気管内投与により低下した。また、運動神経伝導速度の低下、神経におけるナトリウムカリウム ATPase 活性の低下が認められた。これらの結果は、MEP や BaP (benzo[a]pyrene) を経口投与したマウスにおいて同様であった。排気ガスあるいは排気微小粒子の処理により、運動機能の低下、さらに運動神経伝導速度の低下が引き起こされ、神経・行動に影響が生じる可能性が示唆されたと報告している。

Veronesi ら (2005)は、Apo E (アポリポプロテイン E)は脳内で脂質のトランスポート分子として神経の栄養や防御機能に関わっており、Apo E -/-マウスへのニューヨークの CAPs 曝露が脳に神経病理学的障害を生じさせると報告している。曝露濃度はニューヨークの風上、西北西およそ 50km に位置するニューヨーク州タキシード(Tuxedo)における濃度の 10 倍であった。曝露中の平均 PM<sub>2.5</sub> 濃度は 110 μg/m<sup>3</sup>で、長期の濃度平均は 19.7 μg/m<sup>3</sup>であった。曝露条件は、6 時間/日、5 日/週であった。この遺伝子組み換えマウスは脳での高いレベルの酸化ストレスによって特徴付けられた。脳の冠状切片のドーパミンニューロンを免疫細胞化学的染色した結果では、黒質緻密核からのニューロンが曝露された Apo E -/-マウスで Apo E -/-対照群に比較して有意に 29%減少した。さらに、免疫細胞化学的に染色された星状細胞は統計的に有意に増加した。黒質緻密核のドーパミン作動性ニューロンはパーキンソン病で特異的な病変を示す場所である。この研究では、粒子状物質によって影響される系を脳まで拡大して検討し、酸化ストレス感受性の高い人における神経変性の誘導に環境が役割を果たしている可能性が示唆されたと報告している。

Sung ら (2007)は、6 頭のカニクイザル(cynomolgus monkey)に メタルアー  
クステンレス鋼溶接蒸気を低濃度群(30mg/m<sup>3</sup>)と高濃度群(60mg/m<sup>3</sup>)を設け、2  
時間/日の曝露時間で 6 ヶ月間曝露した。血中 Mn 濃度は曝露開始後 2 ヶ月は有  
意な上昇はなかったが、曝露 90 日以後に上昇して一定値を示す様になった。大  
脳基底核の MRI (Magnetic Resonance Imaging) T1 relaxation time が曝露後  
60 日以後減少していくことが示された。すなわち長期にわたり溶接蒸気を吸入  
し続けると、血中 Mn 濃度が上昇し、MRI により大脳基底核の T1 シグナルの  
増強がみられたことから、Mn の中枢神経への移行が示唆された。また、この事  
象に関し他の金属は影響を与えないと考えられると述べている。

#### 5.4.3. 論文による仮説の検証

##### 5.4.3.1. 呼吸器における感染抵抗性が低下する

粒子状物質の曝露による呼吸器における感染防御機能への影響について、感  
染モデルを用いた実験動物曝露実験の知見がある。

CAPs や都市大気の粒子状物質の影響に関して、PM<sub>2.5</sub> 曝露は感染ラット肺か  
らの菌排出を遅らせ、Fe や Ni 粒子曝露でもクリアランス機能を低下させた  
(Zelikoff ら (2002))。

マウスへの DE 曝露により、*Streptococcus pyogenes* 感染に対して致死率の増  
加がみられ、インフルエンザウイルス感染に対しては肺のインターフェロンレ  
ベルの抑制がみられた (Campbell ら (1981)、Hahon ら (1985))。

マウスに DE を曝露し、結核菌を感染させたところ、肺組織中の結核菌によ  
るコロニー生成が増加した (Hiramatsu ら (2005))。

DE の短期間曝露では緑膿菌のクリアランスは低下し、その低下は低濃度領域  
では濃度依存的であった (Harrod ら (2005))。

マウスに CB を気管内投与後 RSV (Respiratory Syncytial Virus)を感染し炎  
症反応への影響を検討したところ、CB 処理により BALF 中炎症細胞誘導が認め  
られた (Lambert ら (2003))。

Th2 タイプのサイトカイン・ケモカイン産生量は感染前 CB 処理により誘導  
されたが、Th1 タイプのサイトカイン・ケモカイン産生量は抑制され、感染前  
の微小粒子投与はその後の免疫応答をアレルギー増強に導く可能性が示唆され  
た。

以上、CAPs や DE 曝露は、肺胞マクロファージの持つ細菌を殺す能力を低下  
させ、インターフェロン産生を抑制し、*Streptococcus pneumonia*、  
*Streptococcus pyogenes*、緑膿菌、結核菌感染の感受性を高める可能性が示唆さ  
れた。また、感染要因が Th2 応答性に関与する知見が得られた。全身性の影響  
として、血中の凝集抗体価の低下がみられている。しかしながら、肺からの細  
菌クリアランス能は、6 ヶ月間の低濃度 DE 曝露において影響がないことも報告  
されており、さらに解明に向けた研究の実施が望まれる。

#### 5.4.3.2. アレルギー性疾患が増悪する

粒子状物質によるアレルギー性疾患の増悪についてはいくつか知見がある。

マウスに沿道で集めた CAPs を曝露したところ、アレルギー反応への影響 (IL-5(InterLeukin-5)、IgE(Immunoglobulin E)、好酸球)は道路からの距離が近いほど強いことが示唆された (Kleinman ら (2005))。

ヨーロッパ各都市で採集した粒子状物質のアレルギー反応におけるアジュバント効果を調べた検討では、粒子状物質 (fine) の方が粒子状物質 (coarse) より増強効果が高いこと、粒子状物質を採集した季節ごとに効果が異なること、水溶性及び不溶性の成分のいずれも効果を有することが示唆された (Steerenberg ら (2005))。

アレルギー感作状態のマウスにロサンゼルス CAPs を曝露したところ、曝露群では炎症性サイトカイン(TNF- $\alpha$  (Tumor Necrosis Factor- $\alpha$ )、IL-1 $\alpha$ )及び転写因子(NF- $\kappa$ B(Nuclear Factor- $\kappa$ B))の有意な増加が認められた (Campbell ら (2005))。

新生児マウスに ROFA-アレルギーを曝露すると、メサコリンに対する気道反応性の亢進がみられ、抗原特異的な IgE と IgG 産生も増強した (Hamada ら (2000))。

DE 曝露とアレルギー感作を併用したところ、脾臓重量の増加が DE 高濃度曝露 (6 mg/m<sup>3</sup>) でみられ、血清中のアレルギー特異的 IgE 抗体価も高かった (Fujimaki ら (1997))。

脾臓細胞のサイトカイン産生では IL-4、IL-10 は高く、IFN- $\gamma$  (InterFeroN- $\gamma$ ) は低い結果であった。アレルギー性炎症モデルに関しては、超微小カーボン粒子をマウスに曝露しアレルギー感作とのタイミングを検討したところ、最終のアレルギー感作より 1 日及び 4 日間前にカーボン粒子を曝露した群で、炎症反応やサイトカイン産生がより増強していた (Alessandrini ら (2006))。

マウスへのアレルギーと DEP の気管内投与により縦隔リンパ節細胞での細胞増殖の亢進と IL-4 の産生上昇が観察された (Fujimaki ら (1994))。

以上、動物実験では CAPs や DE 曝露を抗原感作と併用すると、肺における炎症性サイトカインの誘導だけでなく、脾臓における Th2 タイプのサイトカイン産生を増強させ、血中での IgE や IgG 抗体価の上昇をもたらす。また、曝露と抗原感作とのタイミングが免疫系の増強に重要であると考えられる。

ヒト志願者実験では、ヒトの鼻内へのブタクサ抗原と DEP の投与は Th1 タイプのサイトカイン (IFN- $\gamma$  や IL-2) mRNA の発現の減少をもたらしたが、他のサイトカイン (IL-4、IL-5、IL-6、IL-10、IL-13) の mRNA の発現の増加をもたらした (Diaz-Sanchez ら (1997))。

DEP とブタクサ抗原の粘膜刺激の複合作用としては、ブタクサ・アレルギーのヒトで *in vivo* の IgE isotype への switching を引き起こしうることを示して

いる (Fujieda ら (1998))。

ヒトが遭遇しない KLH (Keyhole Limpet Hemocyanin) 抗原を用いた研究では DEP が新しい IgE 反応に粘膜アジュバントとして作用し、アレルギー感作を増加させる可能性を示した (Diaz-Sanchez ら (1999))。

DEP の曝露はマスト細胞の脱顆粒を促進することによりアレルギーに対する臨床症状の重症度を増強させることを示唆した (Diaz-Sanchez ら (2000))。

アトピー性の被験者では、清浄空気に比し粒子がアレルギー曝露に先行する場合には反応が増強される証拠があると述べている (Hauser ら (2003))。

ノースカロライナ州の Chapel Hill でサンプリングした PM<sub>10-2.5</sub> を使用した実験で PM<sub>10-2.5</sub> の生物学的構成要素は、必ずしも好中球の反応を誘発しないが、マクロファージの反応調節には必要であると述べている。また、PM<sub>10-2.5</sub> の曝露によって、単球の細胞を活性化し、潜在的に、eotaxin レベルを増強することによりアレルギー患者におけるアレルギーあるいは細菌に対する反応を増強する可能性が示唆された (Alexis ら (2006))。

しかしながら、喘息患者では、DE 曝露は、好中球性反応を引き起こしたり、既存の好酸球性気道炎症を増悪させたりすることはなかったこと (Stenfors ら (2004))、喘息グループの気道粘膜の生検組織は、空気曝露後に好酸球性気道炎症がみられたが、DE は、気道の好中球、好酸球やその他の炎症性細胞、またサイトカインや炎症のメディエーターの有意な変化をもたらさなかったとの報告もみられる (Holgate ら (2003))。

したがって、動物実験ではアレルギー性炎症の増悪が DE や DEP により認められたが、ヒト志願者実験では、喘息患者について増悪が引き起こされない知見とともに、アレルギー感作を増悪させる知見が存在している。総体として見ると DE や DEP がアレルギー感作の増悪に影響を生じさせていることが示唆された。

#### 5.4.3.3. 生殖器への影響が生じる

粒子状物質による全身影響の 1 つとして生殖器への影響が考えられているが知見が限られている。

ラットに DE を曝露すると、肝及び前立腺の aryl hydrocarbon hydroxylase 活性に増加がみられた (Lee ら (1980))。

DE をマウスに曝露したが、精子の頭部異常はみられなかった (Pereira ら (1981))。次世代への影響、全体の繁殖能力、生存率にも著しい変化はなかったが、唯一、卵巣黄体数の顕著な減少を認めたという報告がある (Pepelko と Peirano (1983))。

一方、DEP をマウスの腹腔内に注射すると、第 1 代 F<sub>1</sub> マウスで精子数の減少と睾丸重量の減少、精子奇形等を認めた (Quinto と de Marinis (1984))。

成長期のラットに総 DE、除粒子 DE を曝露すると、血清中の男性ホルモン(テ

ストステロン)と女性ホルモン(エストラジオール)濃度は曝露により増加し、卵胞刺激ホルモン濃度は逆に低下したと報告されている (Watanabe と Oonuki (1999))。

また、DE をマウスに曝露すると、ライディッチ細胞の形態異常が観察され、黄体形成ホルモン受容体の mRNA の発現量も濃度に依存して低下した (Yoshida ら (1999))。

さらに、妊娠ラットを DE、除粒子 DE 及び清浄空気に曝露すると、性器-肛門間距離は DE 及び除粒子 DE 群で長かったという報告もある (Watanabe と Kurita (2001))。

以上のように、動物実験では、DE 中の粒子成分のみならずガス成分による生殖機能への種々の影響が示されているが、まだ科学的知見が十分でなくメカニズムの解明には至っていないのが現状である。

#### 5.4.3.4. 神経・行動への影響が生じる

粒子状物質の神経・行動への影響に関する知見は限られている。

ラットに DE を曝露すると自発的な運動の減少が見られたという報告がある (Laurie ら (1978))。また、新生仔期に DE に曝露され、その後清浄空気下で飼育された動物では、バーを押して食餌を取る行動の習得率が対照よりも有意に遅くなることが見いだされた (Laurie と Boyes (1980))。

ラットにガソリン二輪車排気ガス(ME)を吸入曝露、あるいはガソリン二輪車排気ガス中微小粒子(MEP)を気管内投与したところ、運動機能が低下した (Liu ら (2002))。また、運動神経伝導速度の低下、神経におけるナトリウムカリウム ATPase 活性の低下が認められた。Apo E<sup>-/-</sup>マウスにニューヨークの CAPs を曝露すると、黒質緻密核からのニューロンが減少し、星状細胞は増加した (Veronesi ら (2005))。

サルにメタルアークステンレス鋼溶接蒸気を曝露すると、大脳基底核の MRI T1 relaxation time が減少していくことが示され、溶接蒸気を長期に吸入すると血中 Mn が高値となり脳 MRI T1 signal が増強されることが示唆された (Sung ら (2007))。

以上のように、動物実験は、DE、CAPs や ME 等による動物の行動や神経系への影響を示しているが、科学的知見が不足していることからそのメカニズムについては不明である。